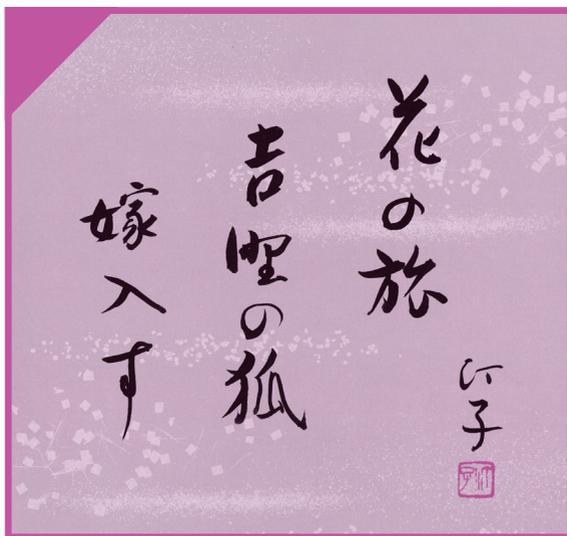


# 詠 詠 集

十一月号



# 花鳥諷詠<sup>®</sup>

令和4年11月 ■ 第416号 ————— 目次

---

花鳥諷詠選集	木村 享史	2
	吉岡 乱水	4

虚子研究 虚子宛書簡を読む (四十)		
明治二十五年九月二十二日 河東碧梧桐書簡 (封書)		
.....	吉村 玲子	7

虚子研究 『六百五十句』研究 (33)		11
---------------------	--	----

一頁の鑑賞	鈴木 風虎	16
	前北かおる	17

この人の作品	子野日さち子	18
--------	--------	----

第三十三回全国俳句大会		19
-------------	--	----

第十七回国際俳句シンポジウム②		23
-----------------	--	----

カレンダーこぼればなし②		26
--------------	--	----

卯浪		28
----	--	----

新刊紹介		30
------	--	----

---

地区行事開催日程表		31
-----------	--	----

編集後記		32
------	--	----

---

「日本伝統俳句協会」と「花鳥諷詠」は公益社団法人日本伝統俳句協会の登録商標です。

# 花鳥諷詠選集

## 木村享史 選

### 特選五句

運動場鉄棒だけの日の盛り

金沢松田 とも子

看取女に褒美のやうな花火の夜

香川三宅 久美子

海月浮き水に形の生まれけり

静岡堀内 智子

いつも見る空なり今日は長崎忌

宇部正司 道子

巫女の振る御鈴涼しき音に舞ふ

大分橋本 照子

### 二句短評

一句目——夏休みに入った小学校でもあろうか、広い校庭に子供達の姿はなく、校舎も静まり返っている。

灼熱の太陽の下で、草も木も人もまた疲れ果てた大地、校庭に一列の鉄棒だけが、命ある光を返している。

二句目——長い入院生活の人の看病をされているのであろうか、付き添う作者にも疲労の色は濃い。

そんな夜、窓の外に大きく火花が咲いた、手を止めて見とれる作者、暫しの幸せを己に言い聞かせる。

### 入選六十句

仁王像天に目を剥く極暑かな 浜田 三沢 孝子

たをたをとゆれて紅さす酔芙蓉 横浜 黒山 敏恵

登山靴泥をはたいて仕舞ひけり 西予 三瀬 教世

風鈴の一斉に鳴るコンコース 京都 本谷真治郎

黒い雨知らず爽竹桃真白 伊賀 前出美千子

老人に飼はれて金魚早起きに 宇部 永田 芳子

夕虹の立ちて家路の美しく 鳥取 宮脇 典子

息荒く吐きて炎天より戻る 鳥根 猪俣 北洞

炎天も句会とあればいそいそと 福岡 深瀬 直治

学童の学童悼む原爆忌 福山 広川 良子

糠床に瀬戸の粗塩足す大暑 八尾 米澤 悦子

愛娘博士になりて帰省する 金沢 森田 康夫

向日葵の元氣も挫けさうな雨 白山 鈴木 恵子

指先の天道虫を見せにくる 松原 加藤 あや

盆提灯仕舞ふ寂しさありにけり 高山 原田 尚子

狛犬の頭上かまきり睨みをり 稲城興 正子  
 朝方の一と降りに秋近づきぬ 輪島 向 佐ち子  
 あめんぼう風に集散繰り返す 福山 佐藤 浩子  
 検閲の黒塗り葉書終戦日 海老名 杉森 和子  
 木登りの出来ぬ子ばかり枇杷熟るる 北九州 篠原 綾野  
 自肅解け母を訪ふ旅露涼し 吹田 辻 昌子  
 汀子句碑松の並木の涼しさに 長岡 笠原佐千子  
 交番はいつも空つぽカンナの緋 神戸 小柴 智子  
 夏霧を乱す汽笛や豪華船 柏 内田 秋歩  
 蟬時雨道曲がるたび新しく 東大阪 中田 豪起  
 般若経書かれし扇よりの風 宇部 小林めぐみ  
 末席にかけ込み扇子開きけり 福山 嶋山 洋子  
 朝顔の窓辺朝餉の支度かな 松山 三好美枝  
 風鈴に風の足りない朝かな 山口 椿 壽子  
 サンダルを脱いで気づきし日焼跡 珠洲 松本 寿憲

週一度通ふ齒科医や木槿垣 鹿児島 永井 紀子  
 雨を呼ぶ風の散らせる合歡の花 江津 篠原てるみ  
 庭芝に今朝も届きし落し文 西予 西川キヌエ  
 花野より花野へ走り高速路 西予 武知 洋子  
 誇る物なき人生や冷奴 高松 宇和川 厚  
 朝焼けに始まる今日の極暑かな 宇佐 水野 公明  
 雲の峰重なり合うて迫り来る 桐生 平山 邦子  
 こだはりの手順ありけり水を打つ 広島 濱本伊勢代  
 花合歡の三瓶を訪ふと言ふ便り 岡山 大野 文子  
 此の辺り昔花街酔芙蓉 愛知 鈴木 保文  
 色足して足してまんまる七変化 北九州 吉富 莞峰  
 日焼して口数減りし漢かな 神戸 田中 由子  
 初秋と思へばこころ前向きに 神戸 田附 光映  
 流灯の母を手波で送りをり 川崎 飯川 三無  
 舌先に仄かな温み新豆腐 高松 真鍋 孝子

● 吉岡乱水選

特選五句

告げられし余命や蟬の鳴き出しぬ

川口櫻 井松翠

父永久に三十五歳終戦日

飯塚馬場 美智子

最上川別の貌とて秋出水

山形布川 國雄

検閲の黒塗り葉書終戦日

海老名 杉森和子

般若経書かれし扇よりの風

宇部小林 めぐみ

二句短評

一句目——迫り来る死期の宣告の切なる思いには一切触れず、「蟬の鳴き出しぬ」と淡々とした事実の表現だけだが、作者の心情は蟬に仮託され却って心境が言外に暗示され感慨深い作品となっている。

二句目——戦死の父享年三十五歳、作者は八十歳前後であろう。平和な自分の人生と対比して、父の悔しさや家族に思いを寄せたであろう切なさを終戦の日の度に想像し、身にしみる述懐、折しもウクライナの戦も止まず。

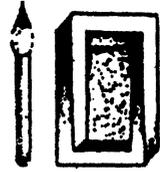
子を夫に預け踊りの輪に入りぬ 八尾 浅井 祥多  
 さりげなくすべて感謝の生身魂 伊賀 松村 咲子  
 奔放の風を捉へて真葛原 伊勢崎 村上 節子  
 糸のころに親しく寄れば風もくる 白山 辰巳 葉流  
 病み抜けし身に新涼の風賜ふ 神戸 塩見 成子  
 夜の秋窓閉めようか開けようか 浜松 伊藤 諦子  
 夕虹に踏破せし峰ふり返る 福岡 工藤 友子  
 秋暑し庚申猿もうだり顔 松原 吉村美穂子  
 ががんばの脚ちぐはぐに折れ曲がり 阿南 湯浅 芙美  
 白靴や空港ロビー闊歩して 福岡 森 順子  
 旅を恋ひ地球儀まはす夜の秋 神戸 内田 泰代  
 うくわつかな秋の蚊のゑること忘れ 井原 片山 千代  
 嵐電の駅ごとに降る蟬時雨 大阪 ふじもと言葉  
 戸締りをするには惜しき月の庭 宇佐 田口チヨ子  
 蟬の声止めば遠くの蟬の声 知多 田辺 澄子

入選六十句

登山靴泥をはたいて仕舞ひけり	西予	三瀬	教世
風鈴の一斉に鳴るコンコース	京都	本谷真治郎	
太陽の少し疲れてゐる残暑	大牟田	石橋	武子
涼み台昭和の風の甦る	南国	高橋	以登
新涼や待ちに待つたる呱呱の声	高松	谷澤	正子
手花火を終へて静かな闇を掃く	神戸	石角	節子
手花火に縁側といふ昭和あり	神戸	田中あかね	
北山の杉美しき時雨かな	神戸	片岡	橙更
夜濯や癒ゆるを信じ看取妻	北見	山崎	肆子
言はずとも汗が語つてをりしこと	福岡	西村	榮子
夕涼み母の心を取り戻し	高松	永森ケイ子	
飛石の先へ先へと夏帽子	高松	冨田	照代
子の逝きし町の花火をひとり見に	石川	駒形	隼男
炎帝の懐にある水都かな	神戸	涌羅	由美
影もまた地に闘へる山車大蛇	大牟田	介弘	紀子
掌で掬ひのむ百選の岩清水	石川	宮下	末子
警策を打たれて涼し坐禅組む	さぬき	原	道子
雲はまだ峰を崩さず山晩夏	大牟田	鹿子生憲二	
早川賽の河原の如く灼け	吹田	生澤	瑛子
佛を連れて精霊蜻蛉増ゆ	豊後高田	大波多美妃	
嬰兒の深き眠りや夏座敷	高知	栗坂	海馬
あめんぼう風に集散繰り返す	福山	佐藤	浩子
木登りの出来ぬ子ばかり枇杷熟る	北九州	篠原	綾野
まだ風の棲まぬしづけさ芭蕉林	鳥栖	緒方	輝子
自粛解け母を訪ふ旅露涼し	吹田	辻	昌子
仮眠さへとれぬ当直明易し	大阪	山内	繭彦
末席にかけ込み扇子開きけり	福山	嶋山	洋子
経のごと師の句書写して涼しけれ	福岡	今中	榮泉
桐一葉ふはりと迷ふ虚空かな	市原	飯塚	咲子
頭上から森のしづくや貴船川床	名古屋	斉藤	始子

露の世に少年兵の墓並ぶ 宇佐 尾崎 陽子  
 看取女に褒美のやうな花火の夜 香川 三宅久美子  
 山寺の句座を襲ひしはたたがみ 十日町 小川 則子  
 家事の手を止めて黙禱原爆忌 熱海 西島ちはる  
 髪洗ふ術も手慣れて看取妻 高松 織田 雅子  
 露草の瑠璃に一粒置く雨滴 福山 来山 静子  
 一と刷毛の生絹めきたる秋の雲 糸島 宮脇 睦子  
 釣竿を磨きに來ませ靈迎 吹田 小井川和子  
 砂日傘開き個室のできあがる 高松 浅野クニ子  
 鉦叩夜風となつて鳴いてをり 高松 信里由美子  
 ナイターの照明揺らす大喚声 金沢 守作 青暢  
 被爆者の黙の生涯原爆忌 郡山 市川 瑞枝  
 いま一度タオル濡らして去る泉 明石 安藤紀代子  
 いつも見る空なり今日は長崎忌 宇部 正司 道子  
 牌楼の風は胡弓か天の川 長崎 伊藤ひとみ

諷詠の果てなき旅路天の川 神戸 明石 裕子  
 マンゴーの香りに入るナイフかな 鹿児島 串間 麻衣  
 法師蟬苑の季節の句読点 一宮 佐々 房子  
 露けしや動画の夫は生きてをり 大分 村上 久子  
 風鈴の一短冊にまた偲び 青森 長島 喜美  
 朝九時を仕事仕舞ひとする極暑 つくば 大倉真知子  
 子を夫に預け踊りの輪に入りぬ 八尾 浅井 祥多  
 三十里歩く六歳敗戦 熊本 平山紀美子  
 記憶みな汗と一緒に流れさう 浜田 小嶺ヤスエ  
 母の書の灯る手製の盆灯籠 諫早 外輪ふみえ  
 夕虹に踏破せし峰ふり返る 福岡 工藤 友子  
 ががんぼの脚ちぐはぐに折れ曲がり 阿南 湯浅 芙美  
 新涼や厨の椅子に放浪記 島原 荒木アヤ子  
 晩涼や三千貫の鐘の音 倉敷 江原由美子  
 戸締りをするには惜しき月の庭 宇佐 田口チヨ子



## 編集後記

悲しんでゐられぬ日々には秋は逝く

汀子

昭和五十四年、父年尾を十月に見送ったばかりの句。ホトトギスの主宰に就任し、夫順三も入院中。公私ともに忙しさのピークだったろう。忙しさはときに悲しみを忘れさせてくれるが、傍から見ると少し痛々しい。季節の移り変わりがより身に沁みる。

●令和五年の俳句カレンダーが完成しました！すでに申し込まれた順に送付を始めています。ただ、事務局は空前の人数不足です。担当者は週一で出社していますが、タイミングを逃すと受付から発注（送付は外部委託しています）まで十日以上かかることも予想されます。お急ぎの発送には対応できないこともありますので、できるだけ早めのご注文をお願いします。

●九月に開催した北海道での全国大会の結果を発表いたしました。北海道ならではの講演の報告は来月号で紹介する予定です。お楽しみに。

●六月の総会で発表した「稲畑汀子賞」「汀子賞」の商標登録が無事済みました。詳細を委員会でご詰めています。発表まで今しばらくお待ちください。

●協会賞の締切は今月末日です。今回から半数が新しい選者となりました。ぜひ渾身の三十句をご投句ください。

須川 久

花鳥諷詠十一月号（通巻第四一六号）

定価二五〇円（但し、本代は年会費を含む）

年会費一〇、〇〇〇円

令和四年十一月一日

発行人 岩 岡 中 正

発行所 公益社団法人

日本伝統俳句協会

〒151 0073 東京都渋谷区笹塚二丁目一八九

シャンブル笹塚二丁目B一〇一

電 話 〇三三四五五五一九一

FAX 〇三三四五五五一九二

郵便振替 口座番号 〇〇一七二八六八二〇

印刷所 日本ハイコム(株)

〒112 0014 東京都文京区関口一丁目一九二